

まち発展の原点を考える「いわみざわ駅まる。」の活動

はじめに

岩見沢市は、2013年に開基130年、市制施行70周年を迎えました。1882年に幌内鉄道が開通したとき、駅が開設され、その2年後に山口県、鳥取県ほか10県から士族が入植し、村の設置となったのです。それから60年後の1943年、農家戸数の増加、炭鉱の振興、鉄道施設の発展などにより人口は3万5千人を超え、夕張と同時に市制が施行されました。

このように岩見沢は、まちが出来る前に開設された駅が原点になって発展してきた歴史があり、自動車交通が盛んになった今日でも鉄道との関係は切り離せないと言えます。

2000年12月に戦前戦後を通して市民に親しまれてきた木造の駅舎が焼失。その再建が契機になって市民が力を合わせて、まちづくりに取り組むことになった活動をご紹介します。

駅再建への様々な思いと刻印レンガプロジェクト

火災のすぐあと、駅には市民から多くの見舞い品が届けられるなど、駅員と市民との心のこもった様々な交流が、駅再建の足がかりになったのです。

2005年にJR北海道が岩見沢市と協力して実施した新駅舎の建築デザインコンペは、「岩見沢のまちの顔となる駅、変わらない価値をもつ駅舎への提案」とあわせて「中心市街地と駅との積極的な関係の提案」など、駅がまちの核となり駅周辺に賑わいを取り戻すための試みがテーマになりました。

最優秀賞は、西村浩さんのレンガとレールをテーマにした作品で、駅に使うレンガを市民から寄附を募る刻印レンガプロジェクトは、市民と駅との関係を確かにするものでした。

新駅舎の外壁を飾る約5千個の刻印レンガは、岩見沢が日本中、世界中の人々から愛されるまちになるようにとの願いが込められました。また、募集のために開設したWEBサイトは、世界的に有名なインターフェイスデザイナーの中村勇吾さんが手がけ、参加者のまちに対する思いや熱い応援メッセージをのせた仮想のレンガが一つひとつ積み上がっていく様子は、まちづくりのスタートを予感させるものでした。

地域の人的資源を活かしたアートプロジェクト

新駅舎の第一期工事の完了にともなって解体される仮設の駅舎に感謝の気持ちを表現するアートプロジェクトが、2007年6月に実施されました。プロジェクトは、キャンパスの再編過程にあった北海道教育大学の学生が参加した仮設の駅舎

の記録と装飾、音楽演奏であり、子どもたちをはじめ大勢の市民と感動を共有するものでした。

その後、刻印レンガの除幕式、駅舎のグランドオープンまで、機会をとらえて実施された様々なアートプロジェクトが市民と駅や鉄道とをより近づけることになったのでした。

観光振興ビジョンの策定と「いわみざわ駅まる。」

開設から数えて第4代目となる新駅舎は、地域との関わりが評価され、2009年のグッドデザイン大賞など、高い評価を受けました。

そこで市の観光協会は、2011年に新駅舎を新しい観光振興ビジョンの拠点に位置づけ、駅再建の過程で刻印レンガなどに参加した約30名の市民が結集し、「いわみざわ駅まる。」と銘打った観光イベントの開催にこぎつけました。

まちの発展の原点である駅と鉄道にこだわり、駅ができて「まちが始まる、人が集まる」の表現をもじり、駅にマルシェのような賑わいが生まれることを目指して、鉄道ファンなどを対象にしたプログラムを取り入れたのです。



鉄道ウルトラクイズ(2013年)

新たな観光ブランドづくり

活動の開始から3年目を迎えた2013年、鉄道や駅をテーマとする文化を将来にわたって継承し、仲間を増やすため、「一般社団法人いわみざわ駅まるプロジェクト」が設立されました。

その活動の第一歩は、空知地域の拠点としてヒト・モノ・コトが集まって発展してきた岩見沢に、新たな観光ブランドをつくるため、2013年9月に駅舎内に情報発信の拠点となる観光物産拠点センター「イワホ」の開設となりました。駅再建をめざした刻印レンガの募集から数えて8年、「いわみざわ駅まる。」は、市民自らが行動し、地域の新たな観光ブランドづくりをめざした絶え間ない活動として新たなステップを登りはじめたところです。



「イワホ」での記念撮影(2013年)

(岩見沢市教育委員会 鈴木栄基)